

(様式 1)

「絆の作り手育成プログラム研究指定校」実績報告書（2年次）

1 学校名等

学 校 名	亀岡市立蒔田野小学校							校長名	貝阿弥 俊也	
所 在 地	〒617-0852 亀岡市蒔田野町佐伯源ノ坊18 電話 0771-22-0631 FAX 0771-22-0797									
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	合 計	教職員数	
学 級 数	1	1	1	1	1	1	2	8	16 ※校長・教頭を含む	
児 童 数	12	16	10	13	18	8	7	84		
連 携 先 (文化財所有者等)	国指定重要無形民俗文化財「佐伯灯籠人形浄瑠璃」									

2 研究校の概要

客観的な学力実態に基づいた「学力向上プログラム」のもと、「授業改善」「個に応じた指導」を全校体制で進め、全教職員が共通理解のもとに組織として学力向上に取り組んできた。最後まで粘り強く課題に取り組む力を付けさせることで、児童の学習意欲の高まりが感じられ、令和4年度の全国学力・学習状況調査では、3教科において府を上回る結果であった。今後さらに活用の力を向上させるために、より一層言語活動を充実させ、「ことばの力」の育成を図っていく。

本校は地域とのつながりが深く、地域の教材や地域の人から学ぶ学習を行っている。その中の一つに地域の伝統文化である国指定重要無形民俗文化財「佐伯灯籠人形浄瑠璃」の体験学習がある。これまで希望者のみが体験していたものをたくさんの児童が地域の伝統文化に触れる機会を持てるようカリキュラムを整理した。これにより4年生の全ての児童が「総合的な学習の時間」で体験学習をしている。また「絆の作り手育成プログラム」の指定を受け、5年生では伝統芸能の体験に基づき、地域の伝統文化財をどのように継承するかについてPBLの手法を活かし学習を進めている。さらに、6年生では、国語科における音読を重視した研究を進展させ「狂言」に取り組み、地域の行事や学習発表会において成果を発表した。（※例年は、オープンスクールと称し全校、保護者、祖父母、地域の皆様に発表し本校の伝統となっている。）これらの学習は、我が国の伝統文化への理解を深めるだけでなく、児童の表現力を高めることや、地域の人から学び地域とつながる学習として大きな成果を得ている。

【令和3年度「佐伯灯籠人形浄瑠璃」上演会の様子（4年生）】



3 主な研究活動

【対象文化財】国指定重要無形民俗文化財 『佐伯灯籠 人形浄瑠璃』

【対象学年】5年生

【付けたい力】

- ① 多角的な視点からアイデアを発想する力
- ② 実現可能性をシミュレーションする力
- ③ 情報収集する力、情報を扱う力

【テーマ】どうしたら人形浄瑠璃を続けていけるのだろうか？

【単元計画】

主な流れ	時数	活動内容	時期	講師
情報収集	1	テーマの情報収集を行い、どんな問題が起きているかを知る。 →課題のありそうな文化財をリスト化し、情報収集作業が円滑に進むようにする。	6月	
	1	文化財保有団体の活動を知り、自分たちにできることの確認をする。	7月	
	1	技芸員さんの話を聞く。 →児童の問い：文化財をどうしていきたいのですか？ 技芸員の返答：今後、こんなふうにしていきたい。を指導者が仕組む。	7月	技
課題分析	1	だれが、どのように困っているかを整理する。	7月	
	1	先行事例について。何が解決され、何が課題として残るのか。自分たちが考えるポイントを明確にする。 →学習のポイントを示し、夏休みの課題として情報収集する。(紙でもロイロでも良い)	8月	
	1	それぞれが持ち寄った課題を共有し、整理をする。	9月	
仮説構築	1	解決のためのアイデアを集める。 →まずは、ブレインストーミングなど、制約なしで様々な角度からアイデアを出す。	9月	
	1	アイデアの整理をする。	9/7	本
	1	技芸員さんに整理したアイデアを見てもらい、意見を頂く。	9/8	技
	3	南桑中学校（本校卒業生）に向けたインタビューやアンケートなどを実施し、解決に繋がる仮説なのかを確かめる。説得力のあるものにするための修正を行う。→インタビューは、家族、地域の方、他学年の職員などに協力をいただく。	9/22 9/28	南 本
検証	5	実現に向けた可能性を検討する。 →だれが、何を、どのような順番で行うのかを考える。実現困難なポイントが見えてくるので、対策案も検討する。	10/6	
			10/12	本
			10/19	
			10/26	
アウトプット	2	6年生と技芸員さんに企画を発表し、意見をもらう。(中間発表)	11/2	技
	+α	広げたアイデアをより効果的に解決できるプランに絞り込む。企画のまとめ。	11月	
	2	最終のストーリーを作り、効果的な方法で課題解決の企画を発表する。	12/22	技

【講師について】

技・・・佐伯灯籠人形浄瑠璃保存会技芸員との連携

南・・・南桑中学校（本校卒業生）との連携

本・・・本庁指導主事、コーディネーターの参観及び助言

【活動の様子】



情報収集・・・人形、語り、三味線が一体となり上演されるのは、全国的にも珍しい。(※近年は増えている。) 一人遣いの串人形は、他の文化財に比べると小さいため、観客との距離も自然と近くなる。演じる側の息づかいや技術が間近で感じられるのも魅力のひとつである。一方で後継者が不足している。子どもたちは、ふるさとの文化財を無くしてはならないと発言し、保存会の方々も今後のあり方について熱い思いを語られた。



課題分析・・・子どもたちは、ふるさとの文化財について何が問題なのかを考え、課題を出し合った。出た課題は「高齢者中心の活動である。古いイメージがあり若者が興味を持たない。そもそも知っている人が少ない。」など。

仮説構築・・・明確な「目的」「ターゲット」を決め、解決のためのアイデアを出し合う。出たアイデアは「たくさんの人に知ってもらう。商品を開発する。芸芸員を募集する。道具を新しくする。」など。そのため何ができるのかをさらに考えた。



検証・・・出たアイデアをもとにグループを組み、より具体化を図った。まとめた考えを自分たちで確かめ合うだけでなく、先輩(6年生や中学生)をはじめ、保存会の方や地域の方にもご意見をいただいた。コーディネーターの方にも「目的」「誰に」「価値はどこにあるのか」「数字を使う」「PRは自由でも、文化財を変えない」など、大切な助言をいただいた。実現可能に近づけるための検証を何度もくり返した。



アウトプット・・・正解のない問いに対して、これまでの経験や得た情報をもとに課題解決のアイデアを出し合ってきた。また、たくさんの方にご意見をいただきながら現実的な方策へと磨きを掛けてきた。最後の発表会では、これまでも関わってくださった保存会や地域の方々の心を動かし、子どもたちのアイデアの一部を活用していただけることとなった。

4 今年度の研究の成果と検証

(1) 学習指導要領の趣旨のさらなる理解

学校で学んだことが、子どもたちの「生きる力」となって、その先の人生につながってほしい。めまぐるしく変化し、予測困難な社会であっても自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい。学習指導要領に込められた願いを叶えるためにも、PBLの手法を理解し実践していくことは有効であると考え、京都府教育委員会担当指導主事、キャリア教育コーディネーターを招き校内研修を行った。PBLを進める際の手順とそのねらいを理解し、ゴール地点における具体的な児童の姿をイメージすることができた。また、年間指導計画をもとにPBLが活用できる教科や単元を調べ、グループで具体的な計画(①付けたい力の明確化 ②ゴールに向かう計画 ③教科との関連)を立て交流をした。



(2) 効果的な ICT 端末の利用

1人1台端末を活用した個々の発達に応じた学び(個別化)や、個々の興味に応じた学び(個性化)を充実させ「個別最適な学び」で情報収集やデータ考察、まとめが行えた。またそれぞれの多様な学びを双方向で共有したり、探究したりする「協働的な学び」として未来社会のプロセスを効果的に活用できた。

(3) 多様な人と繋がる力

第2期京都府教育振興プランの中でも明示されている「多様な人と繋がる力」について、情報収集や検証の過程を通じて高めてきた。これまでの問題解決型学習との違いとして、何度も検証(トライアル・アンド・エラー)を行い、より現実味のあるものにブラッシュアップをしていくことがあげられる。今回の検証では、身近な教師、6年生、中学生(卒業生)、保存会や自治会など、それぞれの視点でご意見や応援をいただき活動を進めることができた。子ども達の一生懸命な姿は地域の方々を動かし、一部のアイデアが国指定重要無形民俗文化財



『佐伯灯籠人形浄瑠璃』の広報(クリアファイル、広報誌など)として使われる予定である。

5 今年度の課題

2年次を振り返ると、上記以外にもたくさんの成果を得ることができた。教職員研修によって単元構想を充実させ、地域の方々とも連携を密にすることで『正解のない問い』に迫る授業展開があった。その一方で、以下の2点が課題として残る。

- (1) 今年度が実質初めてのPBLを活用した研究の推進となり、教師の理想が子どもたちの力を上回っていたように感じる。検証(トライアル・アンド・エラー)を繰り返すことは、予想以上に子どもたちの思考に停滞を招き、明確な手立てを講じておくことが必要となった。
- (2) 長期にわたる学習だったので、子どもたちの学ぶ意欲の低下に繋がったのではないかと。実態を考慮したコンパクトな指導計画にしていきたい。また、成果物がある場合、それらの制作期間を見ておく必要がある。

6 事業終了後の研究構想

【令和5年度構想】

- ・対象文化財 国指定重要無形民俗文化財 『佐伯灯籠 人形浄瑠璃』
- ・対象学年 5年生
- ・付きたい力 児童の実態を踏まえ、担任と担当で決める
- ・テーマ (仮) ふるさとの伝統文化を未来につなごう ※文化財の継承

【令和4年度の実践から次年度の研究に繋げたいこと】

- ・PBL推進にあたり明確なビジョンとプランを持ち、文化財保有団体と連携を密にする。
- ・総合的な学習の時間を中心に、各教科指導への波及を図る。
- ・地域や保護者、先輩方との繋がりの中で、3つの力を育む。→第2期京都府教育振興プラン(①多様な人と繋がる力、②主体的に考え学ぶ力、③新たな価値を生み出す力)
- ・1人1台端末の活用を充実させ個別最適な学びや協働的な学びを促進させる。
- ・主体的に日常生活や社会の出来事に目を向け、課題を解決しようとする態度を養う。